

(19) 日本国特許庁 (J P)

(12) 公開特許公報 (A)

(11) 特許出願公開番号
特開2001-327588
(P2001-327588A)

(43) 公開日 平成13年11月27日 (2001. 11. 27)

(51) Int.Cl. ⁷	識別記号	F I	テーマコード(参考)
A 6 1 L 9/03		A 6 1 L 9/03	4 C 0 8 0
A 4 7 G 33/00		A 4 7 G 33/00	C

審査請求 未請求 請求項の数 7 O L (全 4 頁)

(21) 出願番号 特願2000-148334(P2000-148334)

(22) 出願日 平成12年 5 月 19 日 (2000. 5. 19)

(71) 出願人 599136256

株式会社グリーンプレシャス
石川県金沢市野町4丁目5番22号

(72) 発明者 矢野 明

石川県金沢市野町4丁目5番22号 株式会
社グリーンプレシャス内

(74) 代理人 100064584

弁理士 江原 省吾 (外3名)

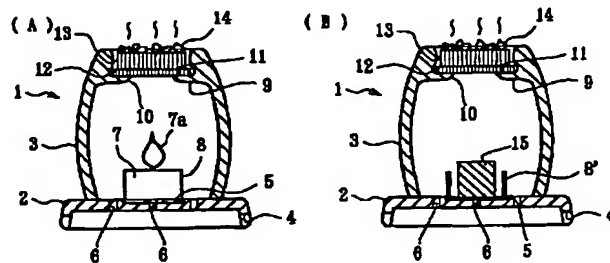
Fターム(参考) 4C080 AA04 BB03 HH02 HH09 JJ03
KK04 LL10 MM31 NN01 QQ12
QQ13 QQ16

(54) 【発明の名称】 発香器

(57) 【要約】

【課題】 各種香料香材が持つ香の特徴をそのままの形でどこでも自然に発現させることのできる発香器を提供すること。

【解決手段】 蠟燭7の上に、天井壁9に貫通孔10を形成した筒状の覆体3を被せる。貫通孔10の上に隣接して形成された拡径段部11の上に第1フィルタと第2フィルタを上下二層構造で配置する。第1フィルタ12と第2フィルタ13は共にハニカム構造であって、上下方向に貫通した多数の微小縦孔12a、13aを有する。上側の第2フィルタ13の上に粒状発香剤14を数粒載せ、蠟燭7の炎7aの熱で発香剤14を100℃以下で適温加熱して香気を発散させる。



【特許請求の範囲】

【請求項1】 熱源の上に被せることができる覆体と、前記覆体の天井壁に形成された貫通孔と、前記貫通孔に隣接して配置され、加熱にて発香作用が促進される発香剤を載置可能な多数の微小縦孔を有するハニカム状フィルタとを有することを特徴とする発香器。

【請求項2】 前記ハニカム状フィルタがセラミック製であることを特徴とする請求項1記載の発香器。

【請求項3】 前記ハニカム状フィルタが炭素製であることを特徴とする請求項1記載の発香器。

【請求項4】 前記ハニカム状フィルタがセラミック製フィルタと炭素製フィルタの上下二層構造であることを特徴とする請求項1記載の発香器。

【請求項5】 前記熱源が蠟燭の炎又は炭火であることを特徴とする請求項1から4のいずれか記載の発香器。

【請求項6】 前記発香剤が珪藻土粒子に香エキスを含浸させたものであることを特徴とする請求項1から5のいずれか記載の発香器。

【請求項7】 前記覆体が珪藻土焼成品、陶磁器、耐熱性の金属又はガラスで構成されていることを特徴とする請求項1から6のいずれか記載の発香器。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】本発明は、植物の枝葉、根茎、木皮、果実、つぼみ、樹脂又は鉱油などから得られる芳香のある揮発性の香油やスミエクスなどを含浸させた発香剤等を加熱して香気を発生させる発香器に関する。

【0002】

【従来の技術と課題】お香は古くから世界中で使用され、香料香材の種類は数千にもものぼるといわれている。そして、お香の種類によって精神統一効果やリラックス効果など、様々な効果が得られることから、近年ではアロマセラピーとして医学的な応用研究も盛んに行われている。

【0003】ところで、お香の種類をその使用形態で分類すると、①線香など直接火を付けるもの、②練り香など間接的に熱を加えるもの、③塗香や掛け香などそのまま使用するもの等に分類されるが、従来のお香の殆どはお香自体を燃やすことにより香成分を発散させる①のタイプであって、お香の燃焼部分近傍の香成分が加熱されて蒸散する仕組みであった。このようなタイプのお香では燃えているところから1mmほど下の部分だけが適温に熱せられて香成分が蒸気となってよい香りを発散し、線香から立上る煙は本来の香りの特徴を隠してしまうため、発煙量を少なくするなどの工夫が必要とされる。

【0004】また、蠟燭やランプなどの炎を利用してお香を間接加熱する従来の②のタイプのお香は、炎に含まれる煤成分がお香に直接付着し、煤成分と香成分とが反応して大切な香の特徴が減殺される傾向があった。

【0005】煤を発生させない別法として電気ヒータにてお香を適温加熱することも考えられないではないが、電気ヒータの場合はヒータに当たる部分とそうでない部分の温度差が著しく、お香全体を適温加熱するのは困難であると共に電気を必要とするため使用場所に制約を受ける。

【0006】また、お香の燃焼ないし加熱用に使用される道具として香炉があるが、従来の香炉は装飾品としての用途が主であって、デザインに凝っているが一般的には実用的機能が不十分で、例えばお香に着火しても火が比較的短時間のうちに消えてしまうものが多く、かつ、取扱いも非常に面倒であった。

【0007】本発明の目的は、前記課題に鑑み創案するに至ったものであって、その目的は各種香料香材が持つ香の特徴をそのままの形でどこでも自然にかつ容易に発現させることができる発香器を提供することにある。

【0008】

【課題を解決するための手段】前記課題を解決するため本発明に係る発香器は、熱源の上に被せることができる覆体と、前記覆体の天井壁に形成された貫通孔と、前記貫通孔に隣接して配置され、加熱にて発香作用が促進される発香剤を載置可能な多数の微小縦孔を有するハニカム状フィルタとを有することを特徴とする。前記ハニカム状フィルタは好適には耐熱性に優れたセラミックや炭素で成形し、さらにハニカム状フィルタをセラミック製フィルタと炭素製フィルタの上下二層構造とすることができる。また熱源は特に限定されないが、場所を選ばず使用できて安定した熱量を低コストで比較的長時間持続可能な蠟燭の炎又は炭火が好適である。また発香剤も特に限定されないが、多孔質に富み含浸性耐熱性に優れた珪藻土粒子に香油、スミエクス、ヒノキ精油などの香エキスを含浸させたものが好適である。また前記覆体の材質も特に限定されないが、耐火断熱作用に優れた珪藻土焼成品、陶磁器、耐熱性の金属又はガラスなどで構成することが望ましい。

【0009】

【発明の実施の形態】以下に本発明の一実施形態を図に基づき説明する。図1(A)(B)に示すように、本発明に係る発香器1は台板2と、台板2上に載置された覆体3とを有する。台板2は珪藻土焼成品、陶磁器、耐熱性の金属又はガラスなどで構成したもので、図2に示すように下面が凹状に形成され、また左右両側に空気流通用の切欠きが形成されている。台板2の上面中央部には浅い円形凹部5が形成されていて、この円形凹部5内と円形凹部5周辺に上下方向に貫通した空気孔6が複数形成されている。そして図2(A)のように円形凹部5に蠟燭7を収容した有底円筒状の金属容器8を置いたり、図2(B)のように炭15を取用した金属容器8'を置けるようになっている。

【0010】覆体3はやや小ぶりの湯呑大であって、台

板2と同様の珪藻土焼成品、陶磁器、耐熱性の金属又はガラスなどを太鼓胴形状に成形して上下方向中央部がやや太径で上下両端が小径とされたものである。覆体3の天井壁9には上下方向に円形の貫通孔10が形成され、この貫通孔10の上側に隣接して貫通孔10よりも大径の円形段部11が形成されている。そしてこの円形段部11に図3(A)(B)に示すセラミック製の円盤状第1フィルタ12が載置されている。また、この第1フィルタの上には第1フィルタよりもやや厚みがあるがやや小径の炭素製の円盤状第2フィルタ13が載置されている。第1フィルタ12と第2フィルタ13は多数の微小縦孔12a、13aを有するハニカム状フィルタであって、詳しくは第1フィルタ12は平面視で正方形をなす微細縦孔12aを有し、第2フィルタ13は平面視で正三角形をなす微細縦孔13aを有する。

【0011】発香器1は以上のように構成され、この発香器1の第2フィルタ13の上に珪藻土粒子に香油、スミエキス又はヒノキ精油などを含浸させた粒状の発香剤14を数粒載せ、蠟燭7に点火して使用する。蠟燭7に点火すると蠟燭7の炎7aの熱で発香剤14が適温加熱され、発香剤14からおだやかに香気が発散される。この際、蠟燭7の炎の熱は第1フィルタ12と第2フィルタ13の多数の縦孔12a、13aを無理なく通って発香剤14に到達し、発香剤14を100℃以下の適温で穏やかに加熱する。従って発香剤14の香気成分が熱により変質することがなく、発香剤14本来の香気は純粋な形で自然に発散される。なお、蠟燭7の炎7aに含まれた煤成分など香気にとって有害な成分は、第1フィルタ12と第2フィルタ13を通過する途中でこれらフィルタ12、13に吸着除去され、発香剤14に付着して香気に悪影響を及ぼすのが防止される。

【0012】次に、本発明の他の発香器を図4～図7に基づき説明する。図4及び図5は本発明の第2実施形態に係る発香器21を示す。この発香器21は図5から分かるように台板22、筒状の覆体23、リング蓋24、フィルタ25、飾り蓋26の各部品を下から順番に積重ねて構成したもので、フィルタ25以外は通常の陶磁器製である。フィルタ25は多数の格子状微小縦孔を有するセラミック製ハニカム構造体で構成され、このフィルタ25をリング蓋24の孔27の内周縁に嵌合載置し、このリング蓋24を覆体23の上部に載せ、さらに覆体23を台板22に載せる。そしてフィルタ25の上に前述の粒状の発香剤14を載せ、リング蓋24の上に飾り蓋26を載せた状態で使用する。台板22には複数の切欠き28や通気孔29が形成され、円状に形成された通気孔29の内側領域に図示しない蠟燭などの熱源が配置される。そして発香剤が熱源で加熱されると香気が飾り蓋26の透かし模様30を通じて周囲に発散される仕組みである。

【0013】次に、本発明の第3実施形態に係る発香器

31を図6及び図7に基づき説明する。この発香器31は前述の台板22とほぼ同じ陶磁器製の台板32、ほぼ球形筒状の陶磁器製覆体33及び皿状部34を有し、皿状部34の中央にフィルタ35が配置される。このフィルタ35も前述のフィルタ25と同じ物であって、その上に載せられた発香剤が台板32上の蠟燭などの熱源で加熱されることにより香気を発散する仕組みである。

【0014】以上、本発明の実施形態につき説明したが、本発明は前記実施形態に限定されることなく種々の変形が可能であり、例えば前記実施形態ではハニカム状フィルタをセラミック製と炭素製の上下二層構造としたが、適当な上下方向厚さを確保することによりセラミック製フィルタ又は炭素製フィルタのいずれか一つを使用する構造としてもよいし、熱源としては蠟燭の他にランプや炭火等、熱を発生するものは全て利用可能である。さらに発香剤としては前記実施形態で説明した珪藻土粒に香油、スミエキス又はヒノキ精油などを含浸させたものの他に、他種類の精油を含浸させたものは勿論のこと、現在市販されている各種の加熱可能な発香剤も同様に使用可能であり、例えばスギ、ヒノキ、イグサ、伽羅、沈香、白檀木、安息香、唐木香、丁子、桂皮、大茴香、乳香、麝香、甘松、貝香、竜脳、冷凌香、竜涎香など各種香料香材を使用可能である。

【0015】

【発明の効果】本発明は前述の如く、ハニカム状フィルタを介して発香材を加熱するようにしたので、熱源に蠟燭やランプの炎を使用しても炎に含まれた煤成分をはじめとする香気にとって有害な成分がハニカム状フィルタによって吸着除去され、実質的に炎の熱成分のみがハニカム状フィルタによって適温に緩和された状態で発香材に作用するから、発香剤が本来有するよい香気をそのままの形で自然に引出して周囲に放散することができる。

【図面の簡単な説明】

【図1】(A)は第1実施形態の発香器の側面図、

(B)は同発香器の平面図。

【図2】(A)は蠟燭を使用した第1実施形態の発香器の縦断面図、(B)は炭を使用した第1実施形態の発香器の縦断面図。

【図3】(A)は第1フィルタの平面図、(B)は同フィルタの側面図、(C)は第2フィルタの平面図、(D)は同フィルタの側面図。

【図4】第2実施形態の発香器の斜視図。

【図5】第2実施形態の発香器の分解斜視図。

【図6】第3実施形態の発香器の斜視図。

【図7】(A)は第3実施形態の発香器の側面図、

(B)はその台板の斜視図。

【符号の説明】

1 発香器

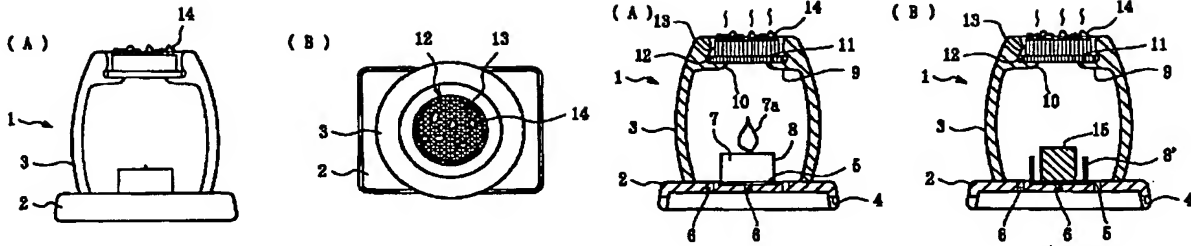
2 台板

- 3 覆体
- 4 切欠き
- 6 空気孔
- 7 蠟燭
- 8 金属容器
- 9 天井壁

- 10 貫通孔
- 11 拡径段部
- 12 第1フィルタ
- 13 第2フィルタ
- 14 発香剤

【図1】

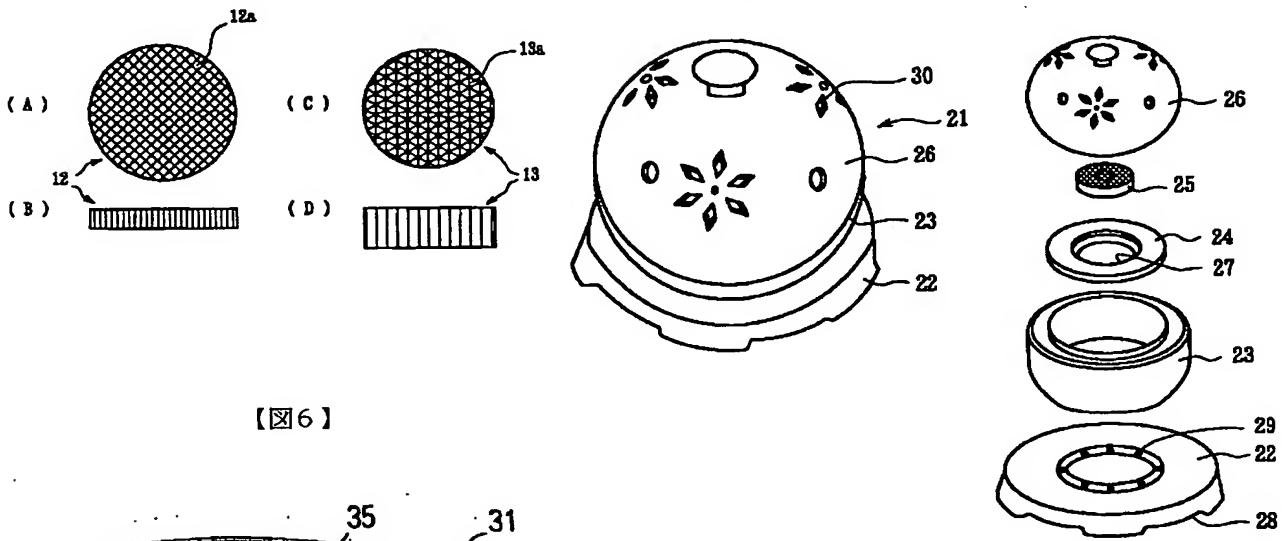
【図2】



【図3】

【図4】

【図5】



【図6】

【図7】

